

「共生社会作る契機に」

障害者や家族ら 国会内でアピール

相模原事件受け緊急討論会

相模原市の障害者施設殺傷事件は発生から2カ月が経過したが、犠牲の大きさと障害者差別に満ちた容疑者の供述が関係者にショックを与えたままだ。こうした中で、障害を持つ当事者や家族らが国会内で開いた28日の緊急討論会では「事件を障害者を含むすべての人が大切にされる共生社会を作るきっかけに」と呼びかけるアピールを読み上げ、事件への向き合い方を語り合った。

【野倉恵】

フェイスカッションは「近所の小学校のお祭りに参加している。手話通訳の資格取得も目指しているという三宅さんは「亡くなった人にも目標や楽しみがあったはず。障害者を知ってもらったのなら、私は顔も名前も出していきます」と思いを口にした。

「生まれ変わっても知的障害でいい」。花屋で働きながら、同じ障害のある仲間との交流活動を主宰する横浜市の奈良崎真弓さん(38)はそう語った。

「(容疑者の言うように)障害者が本当にいないのなら社会はどうなるのだろうか。障害のある仲間だけでなく、障害のない人も座談会を開きたい」「障害が重くても生まれ育った地域で安心して暮らせることが大事」。重い知的障害と身体障害のある長女が施設で暮らす埼玉県の新井たかねさん(70)は訴えた。新井さんは「障害児の親の中にも『この子は教育しても社会の役に立つとは思えない』という人がいる一方で、どんな障害がある子も宝という先生がいた。私も心の優しい思想的な考え方を克服する努力をしてきたが、施設に入れず待機している人は多い。追い込まれる親子もいる」と現状を憂慮した。

「亡くなった19人の氏名の公表を(差別や偏見を恐れる)遺族が望まないというなら社会の責任でもある」。主催した日本障害者協議会の藤井克徳代表も犠牲者の名が匿名のまま議論が進む状態を懸念する。「事件は日本

社会の現状を映し出しているが(政府が2014年に批准した)国連障害者権利条約は、障害のある人が社会に合わせたり、はい上がったたりするのでなく、そのまま尊重され

ると定めている。社会が事件と向き合う手がかりになるのでは」と提言していた。



事件とどう向き合うか語る奈良崎さん(右)ら
二千代田区永田町の参議院議員会館で